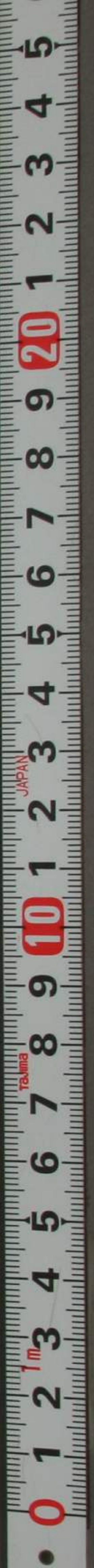


繪本拾遺信長記 七

19
3564
7



門 へ 13
 號 3564
 卷 7



繪本拾遺信長記初篇卷之七

目錄

柴田勝家上系之事

柴田勝家信長と凍云氏

宇佐山城合戦之事

月圖

小田信治之役討死

信長坂本出張之事

一揆多箕地親高寺文藝殿

早稲田 大學 図書館
 昭和 34.6.3 受
 藏 書

秀吉計策一揆を破る

箕尾親善寺落城

諸國一向宗門後一揆降伏之事

小田信興討死

後勅命小田五郎倉沙舟和贖之事

勅使江州下向

江州平願寺一揆降伏之事

二川平九郎門勇力

徳の刃の熾合戦一揆敗軍

繪本拾遺信長記初巻卷之七

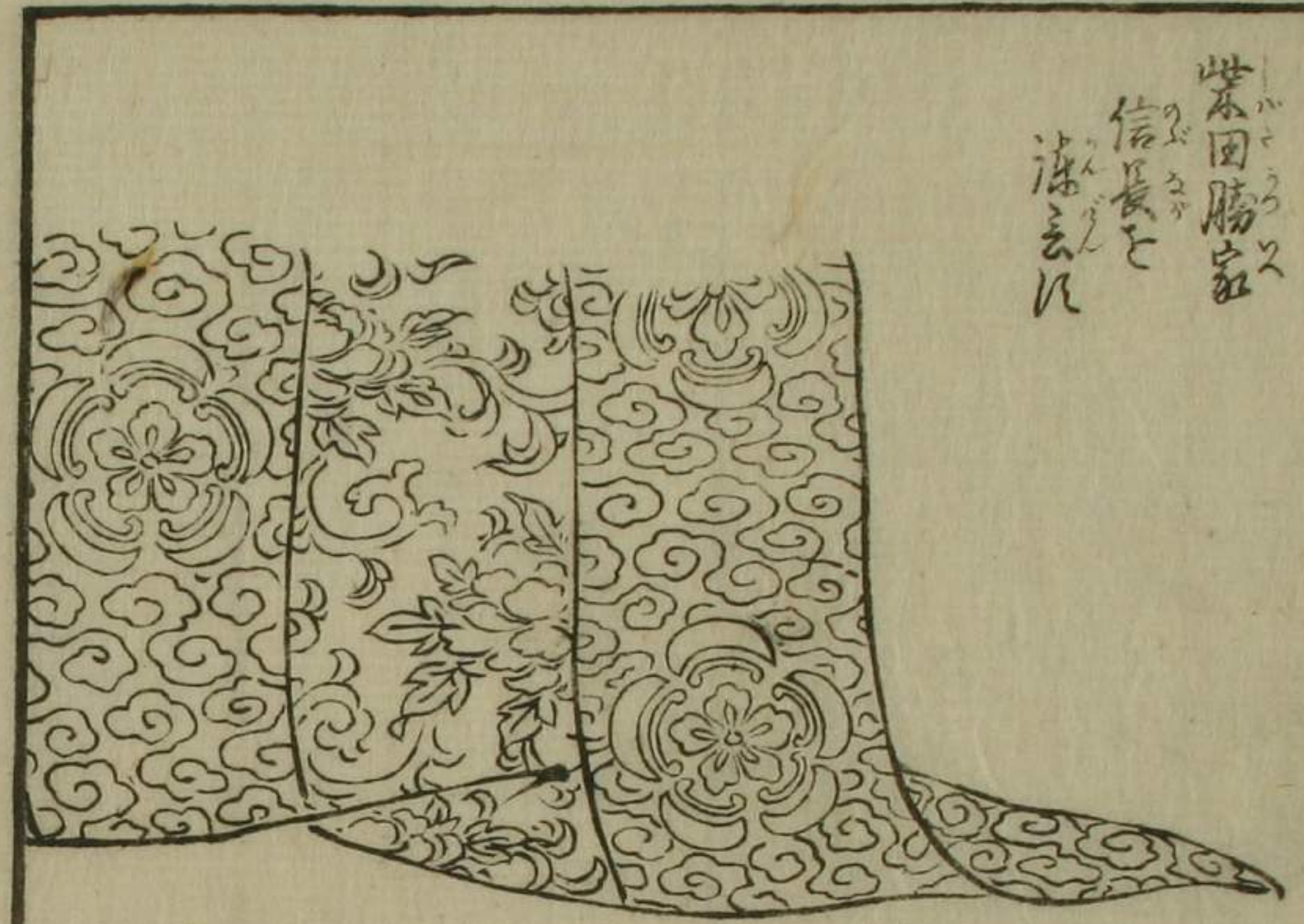
柴田勝家上京之事

小田彈正忠信長卿へ本下着者即秀吉が軍配より門々むりしき
 退口を難く伏見と上着あり新お軍義胎云細河右馬殿及
 一人と御借りてを中京都へ還御し信長の兵尾張の軍兵
 と率し京都へ入りては西へ大津へ押寄り坂本へ向くとおまはるを
 柴田勝家傳りて中々いけは洛中の風は信長こそ摂州の合
 戦討負討死のほやうしと下強勅せる条取り及びは且又
 お軍守渡の武士もこれうき身以て憎く京都へ人数をいらん洛
 中の人或を安堵せし其後坂本へ後向りとも運きつりまこと
 やうと信長守て不測法の中幸なる眼赤の款とさし並用し

信長公の御成程



紫田勝五郎
信長と
清玄



まき塔中と纏わり何のあより日教を貫とぶき汝いあくも老老毛
るれく云捨く馳勢終ふを柴田元素嗚呼の若くてもろれを止
めて信長御の馬の響をたぐ引止り其河又後後守保は仗へ
糸世しより今日まゝと教度の合戦終り押さるとなるとるり
くお物死つて老老毛る不調法は仕り成若やに吾軍の教書屋
よへて茶々と終いせんは不調法はつるりもあぶくはと云教あご
あつて引りしころ信長何の返言よし及び柴田と打捨大はの
方へ馳らまゝ柴田は死打んく奉若き重人の血氣よと有り終ふ
と伏し付て死せしめそ燃の老老毛らば軍は始末こそ肝要を
とくも勢二百余人引退し京都へお入る軍の所容神と伺ひせり
叔系中と纏わりころ信長御こそ御機嫌よく摂州より凱陣あり

要は朝倉隆兵衛謀成のむに州坂中へお向ひしぞ皆く強勃志向まりし
へと云めぐる程よ京都の風況忽よ止まぬくて勝家と誠は州へ押
移程よ朝倉隆兵衛陣不埒は山妻山などの林藤と通るふも恐るく
あつて方々旗馬中と推ささせりいど款兵の討ておよし(実崩)と通
らんめと独りつふ中と信長御の中陣(玉剛)とる実よ勇武絶倫
の兵あると世の人奉て感どる

宇佐山城合戦の事

是より元九月廿日のころ宇佐山城に州宇佐の城と名聞合
戦は及びころ宇佐は信長の弟小田九郎信治三万余騎よてたて
籠り城守あり押しこめせしが秀吉が云よに依て森三九郎門射
可成系端しく信治よ力を併せ城と固めて守りころが九月廿日

宇佐山合戦



日本信長記夜卷七

曉天よりけり佐山と惣妻のまじしとて城前勢の河津村より大軍
 を引て押よせ浪舟が勢い唐橋の渡より搦手一押止に森三九清門
 是と見ると一軍して敵の目と見えんと八百余騎を二より別け
 城外の町家に埋伏せしむると別て敵に向ふ城前勢の先陣朝
 倉式部が支系遠三より余騎と打ち森勢と合ひとんぐ小
 戦ひしけり時町家の藤又埋伏したるもの勢よりしり討死す
 城前勢の志中へ六十挺の鉄炮とつるづけて打ちひるむ不と横槍
 と入て突崩せし系遠が三より余人の軍兵大守討死右村九村及坂
 小にけり時浪舟長政城前の先陣死に崩れとて搦手より二より余
 の還率とまじし勝と系とる城兵の横とまより面とつるに斬て切り
 殺勢微塵と森とまじし森が軍兵彩の勢と打碎と城申して

引の勢を朝倉中務と傍長門守阿波賀三郎等も多勢とて喰とあ
 くは勢よりけり戦ふ知れ小城兵討死者殺を知りは表むは
 森三九清門約多日十八より死軍の中へ討死をばしつる城申
 二より余の小田九郎信治血氣堂人の若ぬるしが三九清門が討死を見
 る大と怒り又百余人の軍兵を引合し城戸を開ひて勝れしつる
 考の申の中へ五二五三と切へ敵と討死しとつる目と余の考
 への大軍切ととも実とも率ともせは八方より引圍んと偏に
 と戦ふを信治と終り討死し後兵討死し或は城方へ大
 坂軍と知りつる朝倉浪舟の西勢へしとつるさびあや城へ
 うけ二の丸と夷浩とれと城申は或は又即九清門肥田玄蕃日
 助右清門等も命と惜まは城しく防ぎ戦ひつるた右より城へ



小田信治
主後討死

日本書紀卷之六十一

とやうにうへへ城を向て押入敷をのこし是より月廿一日は朝倉
の両軍大陣のかりりなり 磯山科の儀を叙次し近日都(美)より
んし軍威を震ひてひしきなる

信長坂本出張之事

去程は信長御の尾張乃軍勢三万騎を引率し遠坂を破て日月
廿二日下坂本陣と布つる軍威遠近よりひたり朝倉渡舟
の両軍信長のよりた働きよ恐怖しつるなり 越前守殿山より登
鋒が峯喜山峠笠山又柵をさうり逆坂本と引つけし討人と構へ
り信長執る叡山乃藤原香左左殿虎左村田中村唐崎西の藤原
と小要宮の世を構へ大お瓜袋軍勢と別り志望の城と信長の本
陣と定ちらるるも漏れしと先陣と合戦を催したりし朝倉渡舟

懐してやあらん教く戦いをほしへいさうり又對陣教目及びひたり
信長命りの詮方なり小室屋多々久岡右衛門尉頼家傳守を
山口より利害を説せ朝倉一味の心と離し軍家の味方なり多々
の飲地懸貴ありしと説せられし衆後等もて取寄せたりし
朝倉と毒を以信長先とせり大ま小怒り本陣守より山口と
中 都て坊主束の妙法こそいと怖くされしはしつて終は當りし
滅却せり今の遠眼を頼るしと腹がら又勝り得る事又は十
九院の照光坊といふ悪僧あり道在道郷の本陣守の門徒と
らひ法款信長を討て京門惣昌と討んと觸る程は諸方の
門徒我もしくと馳集り其勢既又及び計及びひたる照光坊と
つくり一揆の大勢にしては州親善守其他の要害より大勢を顯る



一揆多
其地
秋意
新



勢せきひをまつひつる是より若信長は州へ着陣の礪小谷の後丹波
 を押へしと本下後吉郎と横之の城を築らせ依和山の後丹波
 守が押入ふは屋又郎左衛門尉と百く屋敷の城を止り置れる
 が本下屋の西に一揆の勢は強大なるは筑前守相添して中中
 信長御當時諸方の働きは御中のままささらるは何れ一揆守の
 取妨狼藉法はさらう捨置るは申しまさらるは及ぶに押寄て返す
 敵とと兩勢合して三百又百人計略を定め親善寺其他一揆守を
 各々が季の末先物をれらる士卒三人を門後の百姓を出せ一揆の
 勢をさらう兩城へ進み相言せらるは横之の城を本下後吉郎百く
 屋敷の守に屋又郎左衛門信長の戦ひを助へとく今日坂
 中へ後向其ら屋又郎左衛門討く横山百く屋敷の西に一揆を奮ひ勢

とは少く震ひ給入りしと若々れい大に照光坊大きに其親善寺其
 他より二三の勢を出し一百の林原の中に埋伏せし一百の
 の勢に本下屋と本下屋又郎左衛門と勝ちくも打まさらりけ
 耐屋本下が兩勢とと坂中へ向き進みして押寄ると照光坊一
 揆を中へ進みて鉄炮を打つけしと又槍を入れて突合さりけ耐屋右
 屋敷一百人に一揆を戦ひせ自らの勢を後に向け鉄炮の者又百
 余人を令て敵勢の埋伏しらる中へ先にと推入る門と一日に
 打入れば一揆をさらうて乃爾来大にお遠し林原の中よりさらうと
 ぬく進出るは本下屋知して押寄る斬殺せは討る者は麻を
 取せらるに是とさらう照光坊が一軍大に勢を味方の謀斗破しと
 ころぞ引よくと呼び向き敵を打捨れるに其他の城へ引よと

ひで
秀右
計策
一撥を
破る



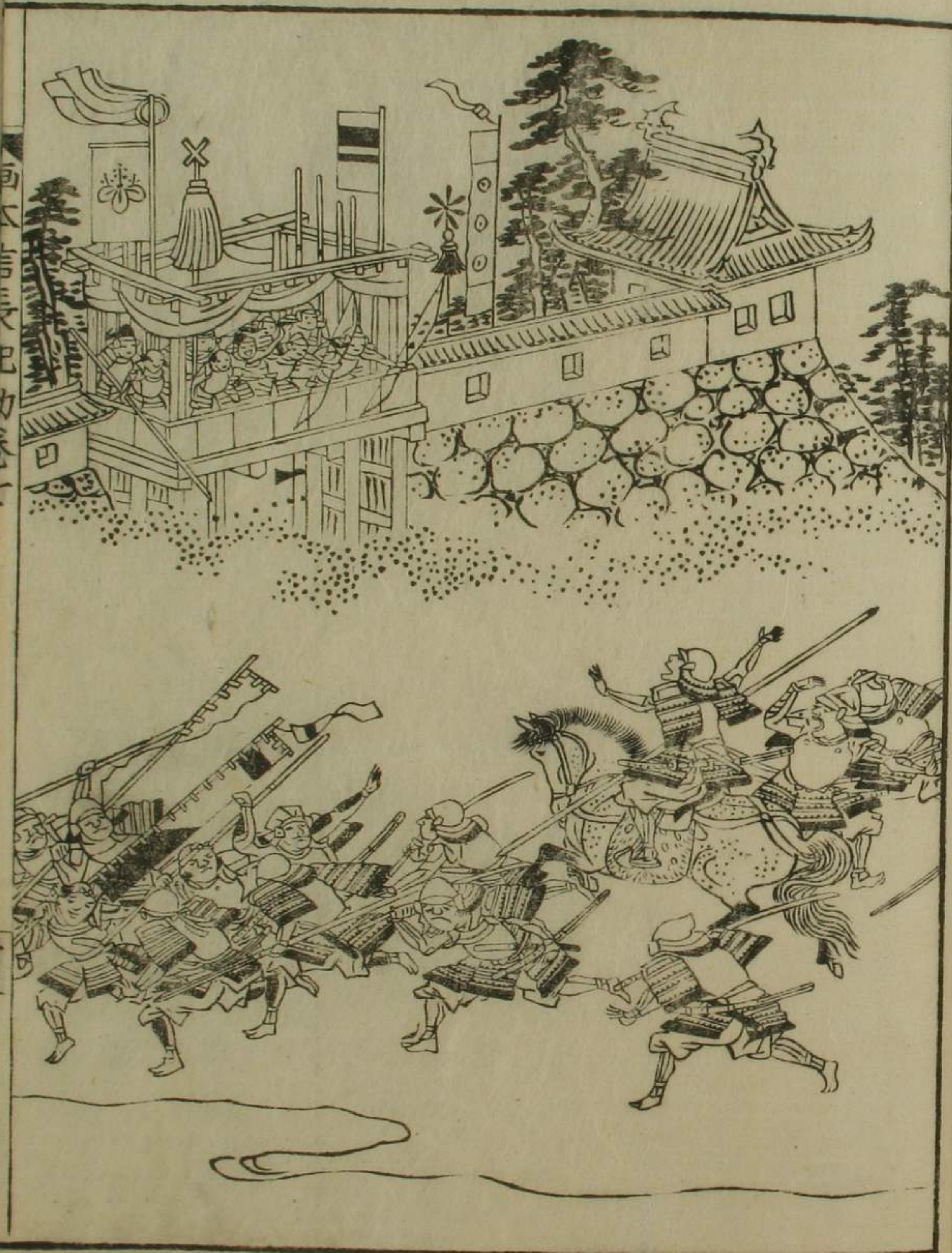
画本言長記初巻七



画本言長記初巻七

是より即ち虎房門士率より下知一人も余り討たせし侍人と臥して
追討せしむけり討つて一揆を余り粉のてりゆく城近く引上
が城門のよき飄草の馬印きりくと輝き本下が良き朝井孫平
堀尾後女を名よりお結より一人も走らぬありとあつては
門を開きくく一文字に斬て出れり一揆系肝と候しつ門の向は城
を歎えりくくこのやこの叶いと引入せば是が二軍をより突立
り合せく羅立といひ適と出る若衆も又六十人大お照光坊と
し二子計の一揆とぐく殺されり相又森の中は埋伏しつ
軍勢も本下に斬りくく辛して親善寺山へ逃れりんとく不
け城ももくや歎勢入りより十文字の旗風よりひらきを良き妻
達影十郎門を開いり討つて本下と換んで切まきくはは又

討つて若一も余り妙覺らりくくは落きて只一戦も卒にたれむ
周をあげ大おかの斬首三十八後若もおせ志賀の本陣もあ
まろくのはしととれり信長孫に感懐しゆひ且秀吉を
近く拓きく朝倉清兵衛山門等と休代と久き謀と回終り秀
吉儀でヤクらの某私に出附の形勢を考る小旗を勢叡山の
徳祖は固く引勢を放て合戦を好むり朝倉清兵衛の柔弱の
よわくは流を計略あるとく光へは其のふり朝倉義系山門の
檀那にして好む流く本親寺は内堀ありて其間又腰はじ成
陣と叡山の徳要は張り本親寺は通じて國々の門後は一揆
を殺させ親善寺として進退する軍士皆勞屈せん附と好む
勝負を一挙に決せんといふ計りゆの之御流り人國々の門後一揆



箕作
親善寺
為城

日本傳長言林卷十

澤尻)と云今勅乳の街とありやづくは在る所よりは是も君乃
 御ちのりけ附と云一は其密出京都(馳より禁廷(奏す)御軍
 家の台徳(遷)勅命を命をみて和腰の儀と云格(一度朝倉
 を小園(追作)其間(道國)の一揆を打平け不意に頼承(九ヶ
 朝倉一家(死)と云)何の(子)細(ひ)まんと(未)承(と)國(つて)云(上)は(信)長
 とい附(は)つ(つ)三(三)姫(本)朝(朝)寺(の)一(黨)や(合)せ(京)都(東)上(坂)本
 (後)治(せ)ば(申)き(大)幸(と)難(儀)て(あ)る(れ)が(未)あ(る)が(一)
 を(之)と(歎)ひ(は)一(討)も(の)都(京)に(奪)り(し)り(幸)と(執)討(ふ)を(也)と
 中(渡)る(れ)々(ま)が(未)細(儀)信(子)後(は)後(者)三(人)と(引)出(し)其(夜)
 密(に)京(都)と(し)馳(り)ぬ
 諸(國)一(向)宗(門)徒(一)揆(儀)記(之)事

横(州)本(朝)寺(は)朝(倉)浪(舟)及(出)張(世)より(信)長(の)大(軍)忽
 圍(を)解(き)退(き)たり(上)人(を)上(下)の(人)に(留)め(安)堵(乃)と(い)は
 り(ぬ)附(は)下(向)朝(倉)一(信)長(大)軍(を)合(て)朝(倉)浪(舟)と(叡)山(は)
 左(圍)と(右)目(對)陣(の)は(す)及(び)元(光)出(山)の(勢)に(應)出(張)せ
 朝(倉)浪(舟)の(余)を(不)同(な)に(中)ま(り)て(中)野(野)田(福)勝(の)三(姫)一
 堂(今)に(退)る(に)出(國)と(是)を(等)と(中)合(せ)は(州)坂(本)後(治)小(園)
 勢(と)和(後)の(攻)討(に)信(長)忽(ち)滅(亡)し(承)宗(門)の(降)と(あり)と(云)ぬ
 評(議)の(不)承(朝)倉(義)系(使)者(を)合(て)中(野)野(田)朝(倉)寺(の)慈(教)信
 長(を)合(て)退(き)け(附)たり(又)軍(勢)を(配)信(長)が(尾)を(討)た(し)人
 頼(承)の(大)軍(其)次(を)討(て)不(道)の(信)長(と)殊(と)し(と)云(は)る(は)是(も)
 今(は)本(朝)寺(は)俄(に)軍(勢)と(僅)坂(本)出(張)の(圍)を(と)り(と)

四ノノノノ

け附珍本を率い先度の合戦味方の敵軍世と飛て勢居て序
 後の座へい出さうなる所如上人自を率て序の軍師の
 先日の敵軍と一対し引け引勢母とる衆其謂く道へは勝敵
 ち兵家の者もや空及び況や兵率を軍師の令と遠ひ互謀の軍
 を如く敵をえうり率と軍師其衆と表給いざると候ふのさう
 何ぞ自ら恥とさるるものさよとえく度同又出給ひ板坂本後
 浩の軍兵を出給ふたや吾やと勢給ふと率率と「さうい敵は
 信長を討たれた附節到來とは今日のさうとてい給ふと信長
 兼てに國の三奴とい出さうり京都又表とらんを恐る河内
 の高屋又畠山治郎昭高と給らせそ外若江の城は三奴老系
 ち又義次交持の城は安丸老道根州は伊丹塩川城本を榎

等の城は勇将を新軍率を守らせ容易付来ぬと「是に
 上人より國の東守門後と西とを信長が後を浩法欲退
 治とえき有給をいされ少く諸方の門後一日は輝龍「出さうり
 後浩世を信長いさうり雅賢はらんあし河内をさうり我らと
 中丸が上人を始め二座の人々をさうりと先と日「候とせらじとを
 困く「堀ひさる是よりいさうり伊勢道にの城丹波を外の國に教養の門
 後一橋を企て同附又京坂へ表とらんといし「さきさう「勝」とも
 ん方こそさうりさうり城は表の若く先見明らかく候と謂つて「其中
 は舞州長崎の長崎守の大地と中「檣城まゝに「わが小忽教養の
 の大軍と集め長崎小楠勢をたれは勢き老とらるる若きも男とら
 ん者い然い又候んで一旦引け引さうり若くは悔むさうり皆法



小田
信興
討死



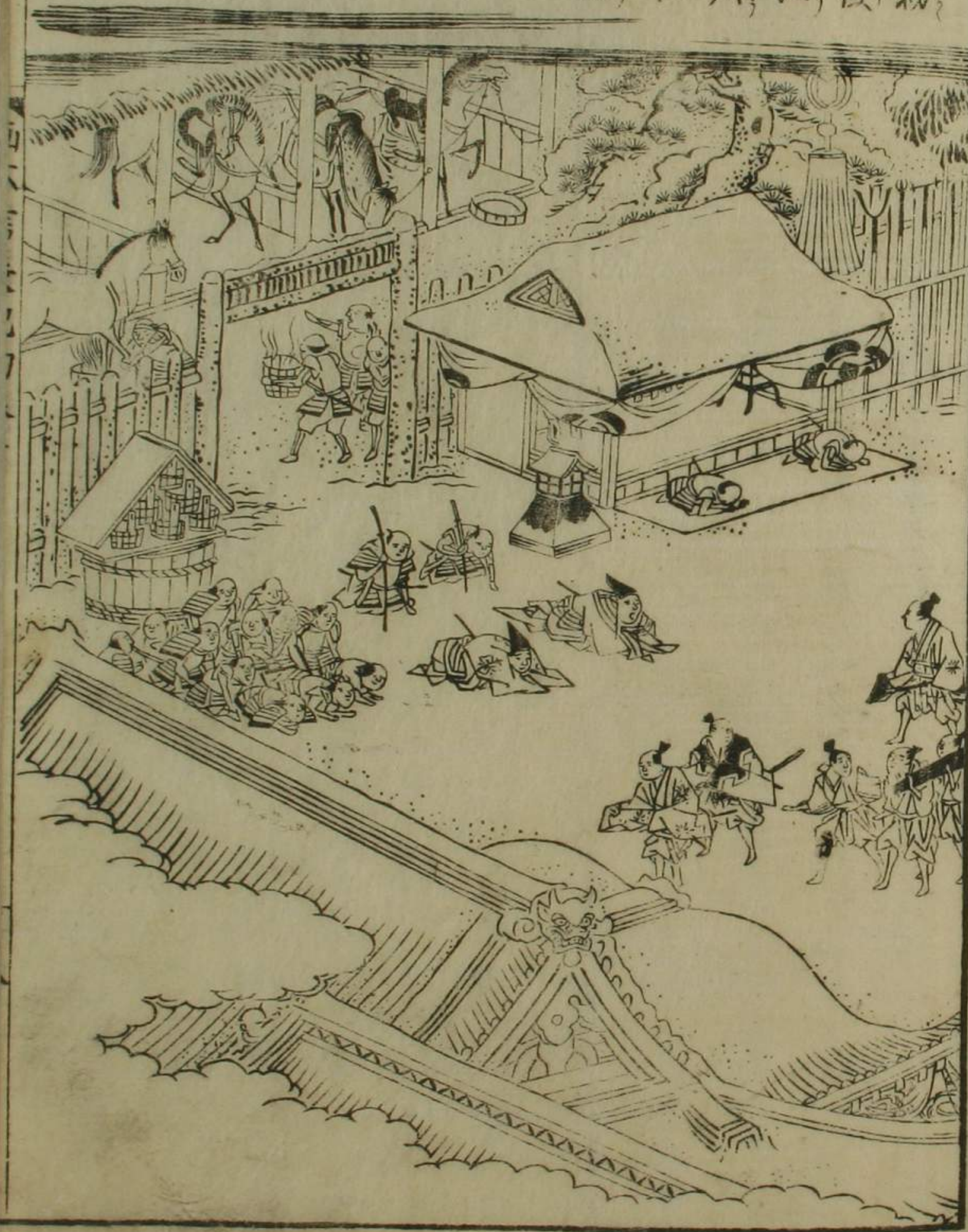
懸附得之と安定ととく一向の誓河と之根小修勝を放火し
柳を夷落し村郷と押死に其勢ひ危て強大なり信長の家
臣龍川左近將賢一益益て勢州築園の爲としく衆名の激
つら軍勢と出合戦殺度及ぶつと門後の一揆別して極
勇の一益益軍せらるる度と割信長の令牙七郎信興とら
河方尾張の地漕はつと不仁足後の城と構(勢)らとと彼一揆
多勢を以て押せ屋敷回るゝ美討らる小城中防然兵はと
とも信長御の後浩り素くは終は無曲論を夷破られ九日
勢て防ぎ然信興今つとよととられどは百戦つとのた
らいけ上の安念ととく元龜元年十一月廿一日天守より後撥
切て矢落し河内の侍が丸と火と放ち悉く討て出一人も討と

斬死をしつとつと信長の本陣(河)進とれ信長涙と落
し眼も怒り且素若く明智を感じらと都よりの唾ひを
密に相付居給ひたり

依勅命小田と朝倉淡舟和睦之事

其年ととる十二月とありつとれ日と降積白雪の遠近の通
洛を塞ぎ嚴密に肌膚と裂きと足鬼て兵杖ととら(中)とを
つとつと糧米の運送自中つとれ小田の軍兵日と(中)と
困つとつと一揆降死せらるし引とつとつと(中)と
踏原測と備心越しと勇死と更と出とつとつと小田軍
義昭とより奏書を遂らと番り出今と正親町院の勅書にて信長
と朝倉淡舟と和睦の儀御覽つとせられ勅使の(中)と

勅使江州下向



言殿軍家の所侵は二階寺後河守倫元希に命殿家の
 御書と双方「下」賜り和睦仕るべきの條は渡されたる三好漢に
 物定のなきを命の殿家の誰か難儀中へござり長く兼依と仕
 向後互に跡意の依みずり流し信長義系死法を乞ふは
 三家万歳を唱へ和睦令くそのひたりは十二月十三日勅使に改治
 去後ひびき十日信長志賀守佐山の陣を引くは湖水と後つて
 本國へ歸らざる朝倉淡舟其望十五日降望山又ヶ村を引く誠
 希と小谷の城へ入りたるけりも摂州本郡寺へ望みしは冷本
 寺を奪取を打て歎じて曰く嗚呼拙いなる朝倉義系君もろろ
 淡舟長政叔山は誠降して信長を喰ひ止めに國摂州と婚め諸國
 の一啼に楯ど合せ斯彼不より懐配して京都へ押より坂本へ美

集るは信長殿はたる軍勢を乞ひ小防ぎ我ふも後軍せどん
 むあそくは計て討てのろくは信長と討えも交るる金
 き小事のいさういさうと和睦したるは陣と拂ふて改國
 りの抄りさよんや信長が小西家とも滅せん其時
 必悔るも何の蓋も是あんと刃を掃る歎息「ろろが呆くて
 後年朝倉淡舟信長は美己がさるるぞ智者の云い遠らざり
 たりと夢人毎小感どりたり

河州本郡寺一揆降死之事

望まとい元龜二年河州佐和山の城を破り丹波守信長は津系
 して城を用き日國を引退くは破り丹波守の淡舟の幕下
 抄ひくるはひなき勇者とて去年姉川表は小田勢と合戦の

附敵味方の目成野に比敷るき働させ功の者之れも後
かありとま朝倉がふるまいの心は叶ひぬとて終つ小田の幕下
属せり是と始りして大尾の城を中務兼九浦門朝妻乃城を
広後河守と皆後舟と捨て信長又取服せり是より門々後舟
又子大よ怒り信長の表裡武士勅命よりよく和服調ひ整河
の雲も乾さる小我幕下の勇士と欺き味方より引入る由家乃
陣と折きて美素とん計略之押の信長もひ知らせんとて幸
寺末寺乃大坊を教多かたらひ門後の一揆と集り多小僧足
又應信長とととんと馳集り大ねは箕浦の折去取寺に又更
新居の令光寺二子余人杉本の忠教寺又百人と坂の順美寺
又百人中須本の信教寺二子余人本町の信教坊又百人蓋田

の美宗寺三子余人唐川の智照寺八百余人長沢乃後田寺に
余人下坂の後照寺三子余人都合其勢二万余人後舟が味方
条じり長政又子大よ小教ひ先小田方の構へ是より極好の城を
美素にひてはのる名は使へんとて家臣後舟七郎中村兵衛
政中務日向守三人を舟に引して元龜二年五月六日極好の城
押させ民家を教使所をとり喚き叫んで美素よりけ城と
守る大ねは由國其浦の怪人坂次郎藤清とらふ者之元より
あひすしうごのりかれば何の怖れもあざれども家老樋口三郎左衛
多村尾右近等と力と併せ必死と覚悟防ぎ致し去後又横山
の城を本下坂を即乗若けりを留て味方の附城美素をさせて
まけしは後浩せんと証出が折居人教もあまうりけしは度後



二川
辛九清門
勇力
中

不の百姓とわたり種を被紙籬をえおせ近辺のくくよとじ
 め旗を動かし令報と鳴し多勢の勢より元よりては其
 めい女勢又百余人例の飄單の馬平共先は押立自ら大音
 二名系よりい出附日本一の別の者本下後吉郎強押の後落と
 ころぞ一揆の奴系そこ刻まに鳴りく一揆の後陣後田寺か
 勢の中へ面もろくは切てりりには方へむと追りてせは次は控
 し後照寺裏の山道して逃れを秀の吉郎知しと逃る者と退る
 り多し斬捨はして首と丸々と罵て志宗寺に三々余人の心中
 へ五三五三又切てく右と左へ追崩れ其ありとまは烈しきり極
 虎の群羊の中よへく教く追する者には「城の中よりこれと
 かんく本下が後落をぞ討て出くか」と合せよと城の中へ人極

治郎極は多羅尾のちとも又時と喚ひく突まき集り勢の
 一揆だつ流成も刃にうて逃れと城兵秀の吉郎勢と一むにあり
 追討は数例は一揆の大お吹草寺新子の勢又百余人入智
 て戦へい金光寺法親寺後照寺等も後軍とまどり又余
 の勢とめて下長坂とてえてし極本下が憐なる小勢と八方各
 名固と火花とらりして戦ひたる度よ極は良等三川平左衛門
 つい大力の男あり義系よりの戦ひはち力も刀も折おてきり
 追考者と左右のひれ引とらへ人磔と投くまは一揆の軍兵はる
 冷し乃勇力や人間業はよもあはしと是がふる用きるひ
 きよ引くさかりたる本城と坂の吹草寺大さ小怒りきこるき
 若とも軍の仕中や款の天麻老鬼神よりの命と捨て戦



又は何の恐ろしき事か我々續けと叫び月々二ツ玉也（二ツ玉也）鉄炮
の掃くひを定めてお敵つゝ二川の運命や憂うり人獨板と
をおぬれ霧よりりろく滑らせり多羅尾右道是と刃を
悪き坊主と勅くるといふまゝ小太刀の槍とさうふ門と打を
がれ明茶守と突くれば明茶守少しも強がはれく槍と打
ふ門く人ませとせに戦ひが右進が武勇や勝りたるを
茶守と美道又実例（美道又実例）首と死てはとより其外城方の勇士
林甚之悪といふ者もけあつて討死とれば一揆方の別（別）の若返田
又右邊門加助七人んと十余人戦死（戦死）引き立てんへるは香
右采配（采配）おろり味方を拓きとい実崩とんき塔合るるを進め
と下知といふ下が勇長朝比奈平勝須賀小六福田大炊屋尾

後外等切先とならんといふて斬まはし一揆の勢勢終み
叶り下板にこそ別れを託ましく後辺の海へ抄い落し湖中
漂ふ大勢を退まはしとせんて又切敷の原より海士の業
の勢つゝふまゝ小畑よりくるがれ討る者九七百余人数本下
勝岡を三度上げ銘く居城へ引えたる

繪本拾遺信長記初篇卷之七終

國朝長誌補卷廿

一十九

